

奈良・新堂遺跡^{しんどう}（角田地区）^{すみだ}

- 1 所在地 奈良県橿原市東坊城町
- 2 調査期間 第一二次調査 二〇〇六年（平18）七月～十一月
- 3 発掘機関 橿原市教育委員会
- 4 調査担当者 平岩欣太・寛 和也
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 平安時代末～鎌倉時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（桜井・吉野山）

新堂遺跡は、橿原市の西方、葛城川と曾我川に挟まれた沖積地に立地する。当遺跡は、京奈和自動車道建設に伴う調査を契機に命

名・範囲が拡大され、また、これまでの調査により縄文時代から中世までの複合遺跡であることが判明している。調査区の東側には、埋没河川が条里の乱れとして現地形に残っており、今回の調査地は河川の左岸にあたることが予想された。調

査面積は九〇〇㎡である。

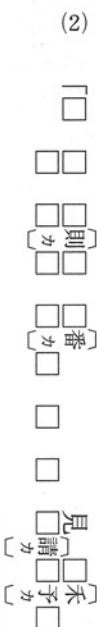
調査の結果、鎌倉時代に埋没した河川の左岸と、左岸部に広がる平安時代末から鎌倉時代にかけての屋敷地を確認した。屋敷地に関する遺構は、鎌倉時代の区画溝・掘立柱建物・井戸などである。

木簡は、鎌倉時代の河川堆積土から六点出土した。今回はそのうち三点を紹介する。木簡以外の出土遺物には、瓦器・土師皿・羽釜・磁器・瓦・硯・温石・下駄・木製人形・木樋などがある。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「符録」]

237×(26)×2 051



(58)×(22)×5 081

(3)



325×45×7 011

(1)は呪符木簡で、板目の薄板の片面に墨書がある。右辺は割れで、左辺上部にも欠損がある。上端には整形前の切断痕が一部残る。「戸」と「鬼」を組み合わせた符録のみで、他に文字は確認できない。(2)は横材木簡で、上端と右辺が欠損している。各行に概ね二文字ずつ、一一行分が残る。文字は大半が消えている。(3)は完形で、

上下両端に削りの痕跡が残る。表裏とも複数行にわたって文字が記され、梵字のような文字もある。重ね書きがあることからみて、習書木簡の可能性も考えられる。

なお、木簡の釈読にあたっては、奈良文化財研究所の市大樹氏のご教示を得た。

9 関係文献

奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会『平成一八年度奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』(二〇〇七年)

(平岩欣太)

